

健やかな老いと読書

Successful aging and reading

石川 亮

図書館学課程教授

以下は「 」、『 』を用いて、参考文献からの「引用部分」、『引用書名等』を表現する。
引用文献には入手（利用）しにくいものもあり、説明文の後部に「引用部分」として記載した。
「 」、『 』は石川説明文と重複記述もあり読まなくても結構です。本文は初めての分野であり引用も多く、研究論文としては入口の段階といえます。

目次

I. 読書世論調査、定年近い企業内勤務者	P. 78
（「読書世論調査 1998（平 10）年」「高齢者と適応 2003（平 15）年」）	
II. 足立区立中央図書館と都老人総合研究所の活動例	P. 79
（「区立図書館 2005（平 17）年」「都老研 2004（平 16）年」）	
III. 「絵本の力、河合、松居、柳田、岩波書店 2001（平 13）年」	P. 83
IV. 「文藝春秋 1999（平 11）年 10 月号寄稿 柳田邦男「いま、大人が読むべき絵本」	P. 92
V. 「読売新聞高齢者読書対談 谷川・柳田（2005（平 17）年 6 月 7 日）」	P. 94
VI. 「回想法について」	P. 97

はじめに

この論考は、高齢者にとって読書が重要であることを示そうとするものである。

高齢者のサクセスフル・エイジング Successful aging（健やかな老い：都老研説明から）の追求に読書活動が重要と思われる。読書には、自分一人で読む場面と、他人に対して大人や高齢者が絵本などを読み聞かせる場面とがある。

毎日新聞読書世論調査から高齢者（60 歳代・70 歳以上）の読書傾向をみると、読書好きの傾向は、70 歳以上の女性（28%）を除けば、全体平均に近く全体と比較してもそれほど差は見られず、一定の読書をしていると言えよう。高齢者の健やかな老いの実現には、読書も重要と思

われる。60歳代と70歳以上の読む雑誌では、「文芸春秋」を読む回数が多いことが言えるようである。

個人読書の時も他人に読み聞かせを行う時も、これまでは児童向きと考えられてきた絵本・童話が、大人が自ら読み、他者に対して使うのにも適していることを、柳田邦男・河合隼雄・松居直などの文から説明したい。

公共図書館や東京都老人総合研究所（都老研と省略）などでも、区立図書館による高齢者向けの読み聞かせ、都老研が推進しているボランティア高齢者による読み聞かせ運動が広がりを見せつつあるようである。

藤田綾子の調査『高齢者と適応、藤田綾子、ナカニシヤ出版、2000年3月』によると、定年が近い企業内勤務者のその趣味は、読書：49.4%、国内旅行：48.2%、スポーツ：37.6%であり、読書が1位となっている。高齢期を迎える者にとっては読書の位置付けは大きいといえる。参考文献 (2) P.188

高齢者は昔の出来事を思い出すことが多くなり、絵本や童話についての効用は、老年期の回想法の考え方を応用することが可能である。それまで否定的にとらえられてきた老年期の回想を促進し、心理学的援助に応用され、肯定的に再評価されている。

(回想法)は話し手が、過去の思い出を語り、話の聞き手との交流を通じて、人生を振り返る支援をすることで、話し手の心の安定と周囲のさまざまな人との質の高い交流を目指す援助の方法である。回想法は日本の高齢者の医療・福祉の現場でとてもポピュラーになりつつあり、研修の機会もあるようになった。

参考文献

「絵本の力、河合、松居、柳田」「読売新聞対談 谷川、柳田」「柳田の文章」を引用して、大人や高齢者にとり、絵本を読んでもらうことの重要性を説明する。

I. 毎日新聞読書世論調査と定年近い企業内勤務者

(「読書世論調査 1998 (平 10) 年」, 「高齢者と適応 2003 (平 15) 年」)

1. 読書世論調査から高齢者の読書傾向をみる。

高齢者の読書傾向は毎日新聞読書世論調査からは、読書好きの傾向は、70歳以上の女性(28%)を除けば、全体平均に近くあり、全体と比較してもそれほどの差は見られず少しは少なくなるが、全体の年代に近く読書好きであると言えよう。

『毎日新聞社「読書世論調査」1998年版』

年 齢	読書好き嫌い	
20、30、40、50、	読書好き	
好き%	男	女
全体平均	43%	46%
60歳代	40%	44%
70歳以上	41%	28%
	好きでも嫌いでもない	
全体平均	47%	47%
60歳代	50%	59%
70歳代以上	41%	59%

月刊誌の読み方（幾つでも選択）について、
60代と70歳以上の特色では、「文芸春秋」を読む回数が多いことが
言えよう。

全体：524冊、60代 157、70歳以上 51。

16～19歳 7、20代 26、30代 56、50代 121

2. 『高齢者と適応、藤田綾子、ナカニシヤ出版、2000年3月』

参考文献(12) 引用P.188

「平成9年に行った、近い将来に企業において定年を迎えるおおむね50歳以上の170人（男：133人、女：37人）への調査から、趣味活動を引用する。『読書：49.4%、国内旅行：48.2%、スポーツ：37.6%』であり、読書が1位となっている。」

II. 足立区立中央図書館と都老人総合研究所の活動例

高齢者のサクセスフル・エイジング（健やかな老い）を推進する上で高齢者の読書に関して、足立区中央図書館で「高齢者への読み聞かせ」が行われており、その講座では「さようなら」や「お迎え」などの言葉を使わないといった留意点や、話の内容が明るい（長すぎない本を選ぶ、学校唱歌や童謡などの歌を交える）といったポイントが伝授され、その図書館の事例を以下に引用する。また高齢者が児童・生徒へ本を読み聞かせる世代交流活動としての事例を東京都老人総合研究所の活動例（都老研活動事例）により報告する。これは興味ある試みであり、高齢者のサクセスフル・エイジング（健やかな老い）を推進する上で、社会参加により「生きがいつくり」の上で今後注目することが必要と思われる活動である。参考文献（3）HPより紹介した。

（都老人総合研究所活動事例まとめ）：都老研の主任研究員藤原佳典により「シニア読み聞かせボランティアの実践」一般公募で集まった60歳以上のシニア70名が受け入れ施設（小学校・幼稚園・児童館）に出向いて、児童生徒を対象にして、手遊びから始まり1人1冊ずつ計3～4冊読んで終わる活動計画である。参考文献(4) HPより引用。成果を出していると思われる。

1. 「足立区中央図書館 (千住五丁目) 「高齢者への読み聞かせ」

2005 (平 17) 年 10 月 11 日、足立区広報課報道担当 03-3880-5816

足立区中央図書館 (同館と広報課の引用了解を得ている。061206 日 17:00 頃)

中央図書館 (千住五丁目) で、「読み聞かせ講座」が開催され、区民約 80 人に、お年寄りと絵本で楽しいひと時を過ごす秘訣が伝授された。

読み聞かせというと、図書館などでよく行なわれている乳幼児向けのことを連想しがちだが、少子高齢化社会の到来を背景に、最近では高齢者への読み聞かせが注目を集めている。中央図書館では読み手を養成しようと、区民向けの読み聞かせ講座を毎年開催しているが、今年はそのテーマとして初めて「高齢者への読み聞かせ」が設定された。

講師を務めたのは、児童作家の山花郁子さん。山花さんは 1966 年に調布市立図書館の司書となり、児童書を研究する傍ら、子どもへの読み聞かせを実践してきた。自らの母が老人介護施設に入所したことを契機に高齢者への読み聞かせボランティア活動を始めた山花さんは、現在はこうした読み聞かせや講演活動に力を注いでいるという。

「 」以下引用文

「講座では、「さようなら」や「お迎え」などの言葉を使わないといった留意点や、話の内容が明るい (長すぎない本を選ぶ、学校唱歌や童謡などの歌を交える)、といったポイントが伝授され、参加者は熱心にメモをとっていた。後半では、山花さんが今まで読み聞かせ活動を行なった経験の中から、好評だったものを実際に絵本を使って紹介した。そこで転ぶと 3 年で寿命が尽きるという「さんねん峠」、鬼のお面をつけていたので山賊に襲われずにすんだという「かあさんのおめん」などが歌を交えて披露されると、参加者からは歓声があがった。山花さんは、「この歌詞に参加する人の名前に変えると、とても喜ぶます」など、ひとつひとつ解説しながらコツを伝授し、参加者を夢中にさせていた。」

2. 「東京都老人総合研究所 藤原佳典・主任研究員「シニア読み聞かせボランティアの実践」 参考文献 (4) HP より引用。

「東京都老人総合研究所 〒 173-0015 東京都板橋区栄町 35 番 2 号

研究調整部 広報・普及担当 電話：03-3964-3241 内線：3008

E-mail : tmigaffa@tmig.or.jp」

藤原佳典・主任研究員「シニア読み聞かせボランティアの実践」

都市部高齢者の社会参加プログラム「シニア読み聞かせボランティア」のあゆみ

地域保険研究グループ 藤原佳典 (主任研究員)、同氏から引用の了解は得ている。

pdf ファイル：都老人研ニュース NO 2005 藤原「シニア読み聞かせボランティア」

「(1) シニアボランティア研究を開始した背景

サクセスフル・エイジング (健やかな老い) を推進する上で、高齢者の社会参加の重要性が提

唱されている。近年では特に高齢者によるレクリエーションやボランティア活動を通じた（生きがいづくり）が注目され、広義の介護予防事業の一環としても全国各地で多彩なプログラムが展開されている。以下引用「」。

「しかし、高齢者の社会活動の有効性や科学的根拠にもとづいた活動プログラムのあり方については、未だ十分に検証されていない。私たちはこれまで行ってきた地域高齢者の追跡研究を通じて、生き生きとした毎日を送るのに必要な能力のなかで、社会的な役割や知的能動性（状況対応、余暇活動など）を維持することが最も困難であり、その低下が手段的自立（家事、金銭管理などの能力）を阻害する予知因子（まえばれ）であることを報告した。そこで、私たちは今年（平成 16 年？）の 6 月から社会的役割と知的能動性を継続的に要求するような知的ボランティア活動を介入手段とする研究を開始した。今回はその研究デザインと評価の視点を紹介する。」

(2) 米国の先進モデルを応用して導入

「介入のコンセプトは世代間交流とした。最近、子どもを取り巻くさまざまな社会問題に危機感を感じる高齢者が少なくないと考えたからです。そのモデルは既に米国において推進されている「高齢者による学校ボランティア」である。

この事業は貧困地域の小学校・幼稚園で授業中に読み書き、計算のサポートをしたり、図書の管理と行うものである。パイロット研究は 1994 年より全米 5 市において開始され、1999 年より Baltimore 市内の 6 つの公立小学校において対象群を設けた 150 名規模の介入研究が進められており、ボランティア児童への心身への好影響が報告されている。藤原は昨年（平成 15 年？）、そのプログラムや介入効果の評価について主任研究者の LindaFried 教授（ジョン・ホプキンス大学加齢・健康研究所）のもとで研究した。私たちはこれらの学校ボランティアをわが国に応用する際に、総合学習や朝の読書時間等を利用した高齢者による絵本の「読みきかせ」をメインプログラムとした。

私たちの仮説はボランティアによって社会貢献（生産活動）＋生涯学習＋グループ活動の三要素が高まり、楽しみながら認知・心理機能および身体機能を維持・改善できる」というものである。」

「対象地域として都心部（都中央区）、住宅地（川崎市多摩区）、地方小都市（滋賀県長浜市）を選び、一般公募で集まった 60 歳以上のシニア 70 名にまずベースライン健診（心と生活のアンケート、物忘れ検査、健康診断、体力測定、一部に脳画像検査など）を行いました。」

「その後、7 月から 3 ヶ月（週 1 回 2 時間）のボランティア養成セミナーをうけてもらった。セミナーの内容は優良な絵本の選び方の学習を中心として、シニアにおけるボランティア、世代間交流やグループ活動の意義、子どもを取り巻く現状と課題、そしてベースライン健診の結果に基づく健康学習と多彩なプログラムを盛り込み、生涯学習として位置付けた。絵本の世界は実に深いものがある。地元の図書館、読み聞かせの専門家や

先輩ボランティアの指導により膨大な児童図書の中から優良かつシニアならではの「味」が出せそうな作品を吟味し、読み合わせをおこなった。セミナー後半ではデビュー先の学校を想定し、6～10人単位のグループワークに移った。受け入れ施設（小学校・幼稚園・児童館）に行きそこの職員から活動上のルール等を学びデビューに備えている。」

(3) ボランティア活動の多面的な効果の評価と今後の展開

グループ別に受け入れ施設への訪問を始める。(読み聞かせ)の方法は受け入れ施設や子どものレベルにあわせていろいろである。幼稚園児1クラス(20人程度)を前に実演する場合は、グループ全体で30分の時間をもらい、手遊びから始まり、1人1冊ずつ計3～4冊読んで、手遊びでおわるといったプログラムもある。

「10月以降、グループ別に受け入れ施設への訪問を始める。1人1冊ずつ計3～4冊読んで、手遊びでおわるといったプログラムが一般的である。これまでの世代交流プログラムはイベント的に年1、2回程度のもが多いが、本研究はシニアと子どもが定期的に頻繁に接触を持つことが双方に最も重要であると、考えている。従って、週1回の実演とそれ以外にも図書室など施設のスペースを拠点としてボランティア間の準備や打ち合わせ、子どもへの図書の貸し出しのサポートを行うなど積極的な活動を促している。

活動開始後、6ヶ月ごとにフォローアップ健診による評価を行う予定である。その際、比較対象群としてボランティアの友人で趣味サークルや他のボランティア活動を行っている方を設定している。(現在約70名登録中)

一方、教育現場から観たボランティア活動の効果の評価するために、子ども、保護者、教職員、に対するアンケートを予定している。高齢者の一般的イメージ、学校ボランティア(PTAなど)団体との違いを尋ねる。」

(4) 本研究の仮説実証の願い

「現在、教育現場は多様な課題とニーズを抱えている。

学校から(読み聞かせ活動)以外に学級サポートや安全パトロールを希望される場合も少なくない。こうした課題は子育て期を卒業して久しいシニアには(目からウロコ)の体験であり、学校関係者などと協力して解決策を探って行くこと自体が質の高い(生涯学習)であり、(読み聞かせ活動)は導入であり、子どもを取り巻く様々な問題に対処しうるような活動へ広がることが予想される。

われわれ人生の目標は(寝たきりにならないこと)ではなく(シニアが地域社会への貢献を目標として、自らを磨き続けその結果として長く健康を獲得することができた)という本質的な仮説を学術的に実証することを私たちは願う。この目標はスーパーシニアのエピソードとして認識されてきたがわれわれ人生の目標としたい。」

Ⅲ. 『絵本の力、河合隼雄、松居直、柳田邦男、岩波書店、2001（平13）年』

絵本の力を引用し大人や年配者にも絵本が適することを説明する。

河合隼雄、松居直、柳田邦男による図書「絵本の力」から引用しつつ、高齢者と読書の関わりを検討する。なを岩波書店編集総務、馬場様から引用頁を記載して引用する許可を得ている。また短大HPでの公開も話してある。(061206日14:00頃 Tel 03-5210-4000)

3人を簡単に説明する。

河合隼雄：臨床心理学者、日本の文化・宗教を研究し日本人の心性を考える、1928年生

松居直：福音館書店にて創作絵本出版を行い作家を育てる、1926年生

柳田邦男：ノンフィクション作家、現代の人間の生死に関わる事故災害等の事象を取材、1936年生

この本は3部構成 [はじめに]、[講演]、[討議] である。

「はじめに」 3人の説明要旨をまとめて、以下を引用「 」する。

河合は、絵本は年齢に関わりなく楽しめる不思議なものとしている。使う人により取り出す可能性に相当な違いがあり絵本の中には音と歌がある。

小さい薄い本でも内容は極めて広く深い。絵本の中にいかに「音」が大切な要素として描かれているかを論じている。

松居は編集経験者であり、あらゆるジャンルの視覚芸術を取り込むことを企図し絵を本の形で表現する絵本は総合芸術として認識されているとする。

関係者（作家・画家・編集者）の複雑な人間関係から興味深い創造への営みが生み出される。その上読者の存在がある。絵本は購買者が大人であり、おもな読者は子どもで、更に読み手として大人は聞き手の子どもと、絵本体験を共有する複雑な立場にあり、絵も言葉として読み取れない幼児が独りで、絵本を開いて楽しむのは絵そのものを読んでいる。

絵本には言葉の糸が二つあり、それは文字としての文、及び絵も言葉として読み取れる。柳田は人生後半になって絵本の語りかけを再発見し、絵本の物語と絵や言葉にかけて読んだ時と違う意味や言葉に深い味わいを見出した。絵本の再発見の視点から話している。児童書の専門家ではない柳田が、人生後半になって絵本の語りかけを再発見した。絵本を身のまわり置きじっくり読むべきだと思う。

[はじめに] 河合：(絵本の不思議)『絵本の力』

参考文献 (5) P.11-P.12 「はじめに」河合、松居、柳田の引用

「講演では「絵本の中の音と歌」と題して話す。絵本好きな人の知る『はるにれ、姉崎一馬、福音館書店』を見ると、このはるにれは年・月・日のいつもたくさんの音に囲まれて生きてきた。この絵本を見て多くの人がある音に聞かずに。見る人によりそこから取り出す可能性に相当な違いがある。」

松居：(絵本が目覚めるとき)

「1956 (昭和 31) 年に月刊物語絵本「子供のとも」を創刊以来、編集者として”絵本の可能性”を追求してきた。昔話、創作物語、翻訳による各国の物語、自然・社会科学系の絵本、モチーフが生活・遊びなどの絵本・図鑑など食欲に触手を伸ばし、企画編集をしてきた。絵本の絵画表現の典型とされた「童画」にあきたらずあらゆるジャンルの視覚芸術 (日本画・洋画・水彩画・版画・グラフィック・漫画) を取り込むことを企図した。

文と絵を本の形で表現する絵本は総合芸術として認識されていたが、関わる一筋縄ではゆかぬ人間関係 (作家・画家・編集者) から興味深い創造への営みが生み出される。

また [講演] では、絵本は子どもに読ませる本ではなく大人が子どもに読んでやる本であると明言している。その理由は自分で絵本を読むと時間差が生じて言葉と挿絵の間に溝ができると云う。

日本には 12 世紀の「絵巻」以来、絵物語の伝統がある。」

柳田： (いのちと共鳴する絵本)

「人は人生で危機・試練に直面する。私は 50 台後半に次男が心の病で自から命を断った。うつ状態に落ちた私は 3 ヶ月たったある日、書店にて宮澤賢次の『風の又三郎』に手が伸びて併せて数冊の絵本を購入し、帰ってからそれらを読み心が癒された。絵本の物語と絵や言葉にかけて読んだ時と違う意味や言葉に深い味わいを見出した。それからすばらしい発見がたくさんあり、絵本のとりこになった。忘れていた大事なもの (ユーモア、悲しみ、孤独、支え合い、死、いのち、別れ、) などがあぶり絵のように浮かび上がってくる。絵本の再発見の視点から話す。」

[講演] において河合、松居、柳田は次ぎのように述べている (要旨)。

河合は、絵本は未知の愉快なことがたくさんあることを教えてくれる。多数の木の子 (冬芽) が合唱し、『冬めがっしょうだん、長新太作、福音館書店』には、たくさんのふゆめ (冬芽) が合唱し、この絵本からは歌声が聞こえてくる。

また『魔法のことはば、福音館書店』を引用して、絵本の言葉を考えるときこの絵本があるとする。「エスキモーに伝わる詩」と題がついている。絵がすばらしいくここにはアメリカ先住民にとって星が大事な世界のはじまりのイメージがある。(ずっとずっと大昔、人と動物がともに、この世にすんでいたとき)。この絵から人と動物が一緒に住んでいるという気がしてくる。

松居は、自分の母から聞かされた童話などの体験があるとする。その体験から編集者の道を歩んだとしている。また古典を読み『平家物語』、『奥の細道』など声に出して読んでいた。声に出した方がイメージが広がり、古典の文体の美しさを感じられるとする。

柳田は、大人が自分のために読む作品としての絵本と捉える意識が大事である。この問題意識は (人生後半に読むべき本) (人生に三度読むべき本) と表現できるとしている。医師が一冊の絵本『わすれられないおくりもの、スーザン・バーレイ作 (英国) 評論社』、を用いて、それを読んで幼児が死に直面する時、残され周りの幼い子二人にどうして死

に備えることが出来たか、を紹介している。

[講演] 河合：(絵本の中の音と絵) 以下「 」引用。

参考文献 (5) P.13-P.44「河合」を引用

「絵本の可能性として絵の中に、音も歌もある可能性を思う。

『冬めがっしょうだん、長新太作、福音館書店』を引用して、貴婦人のような顔をした、たくさんのふゆめ(冬芽)の写真が写っている。春がきて林の中の冬芽合唱団が歌を歌っている。長さんの文章で「みんなはみんなは、はがでてはがでて、はながさく」と合唱団が歌を歌っている。「ふゆめに顔があることも、ふゆめが合唱することも私は知らなかった。この絵本は、このようにまだまだ未知の愉快的なことがたくさんあることを教えてくれる」。すごくすきなこの本について100文字でつぎのような文を書いた。『ふゆめに顔があることも、ふゆめが合唱することも、絵本から歌声が聞こえてくることも、私は知らなかった』。この絵本はこのようにまだまだ未知の愉快的なことがたくさんあることを教えてくれる。」

『魔法のことば、金関寿夫訳、柚木沙弥郎絵、福音館書店』を引用して、絵本の言葉を考えるときこの絵本がある。この絵の文も好きだ。「エスキモーに伝わる詩」と題がついている。柚木さんの絵がすばらしい、ここにはアメリカ先住民にとって星が大事な世界のはじまりのイメージがある。(ずっとずっと大昔、人と動物がともに、この世にすんでいたとき)。この絵から人と動物と一緒に住んでいるという気がしてくる。金関さんはアメリカ先住民の神話をたくさん訳している。人が動物になったり、動物が人になれたそういう時代です。動物も人も魔法の言葉でお互いに通じていた。一番最後の答えは『世界はただそういうふうになっていたのだ』。人間は言葉の線を進めたために昔の音の世界、歌の世界、心の底から動いてくるようなものを忘れかかっているのではないだろうかという感じがする。」

『アフリカの音、沢としき作・絵、講談社』を紹介している。

(かわいた風に乗る、どこからか太鼓の音が聞こえてくる)。アフリカの風景ですね。この絵には音がありませんが、耳をすました人には音が聞こえてくる。誰か太鼓を叩いており、そこには(木をくりぬいてつくられたタイコには一頭のヤギの皮がはられてる。死んだヤギが残した皮は音になってまた生きる)と書かれている。これは面白い考え方であり、ヤギは死んだけれど音になり生きており、このような音は世界に満ちあふれて残っている。(かわいた風にのりタイコのことばがはこばれていく、ことばはみどりの葉をゆらし、遠くへ遠くへはこばれていく)。(ずうっとずうっと遠い祖先の昔から変わることのない夜、星たちとねむる)そして夜がきて朝がくる。(とくべつな朝がきた、まつりの朝だ、となりの村からそのまたとなりの村からも、タイコの音といっしょにおおぜいの人たちがあつまってくる)。この絵も音に満ちている。穀物を突いている音があり、ご馳走がつくられ、みんなで太鼓を叩き踊って太陽に感謝し、みんな喜ぶ。人々の命の鼓動が聞こえてくる。その他引用：『冬めがっしょうだん』、『魔法のことば』、『ア

フリカの音』、その他」

[講演] 松居：(絵本が目覚めるとき) 参考文献 (5) P.45-P.81「松居」を引用

「だれでも秘密の花園をもっていると河合さんが話された。私の花園を話す。私は河合・柳田さんと違い絵本を読む立場ではなくつくる側の立場だ。絵本をつくる時頼りになるのは、自分の目と感性だと思っている。1950年代は現在の絵本のような本の出版が主流であり、絵本に大きい可能性を感じた。そう判断したことをあとで考えると、自分の絵本体験である。

昭和の初期に母が幼年の私を寝かせるために蒲団の中で繰り返し読んでくれた北原白秋の童話などを、耳から聞く母からの楽しい自分自身の絵本体験がある。北原白秋が好きで、童謡を繰り返し耳から聞いた。絵本は絵を見ながら読んでもらうとき大きな世界を作り、不思議な働きをする。自分で絵本を読むと時間差が生じて、言葉と挿絵の間に溝ができる。

その体験が出版界に入って小出版社の生き残るには絵本に大きく強い可能性を感じたのだと思う。絵本の編集者になって絵本は子どもに読ませる本ではなく大人が子どもに読んでやる本だとの編集方針を打ち出した。いまでもその考えは変えていない。(絵を見る喜び)として小学生の頃、父に連れられて京都岡崎の美術館で「帝国美術院展」をみて、日本画の前で気になる美しい女性の絵があり、上村松園の絵であった。この人の絵にであったことは幸せであった。戦争中に京都の博物館で大きな絵巻物展がり、絵巻物に興味をもった。朗読が好きで、古典を読み『増鏡』、『平家物語』、『太平記』および『奥の細道』など声に出して読んでいた。声に出した方がイメージが広がり、古典の文体の美しさが感じられる。」

『100 まんびきのねこ、ワンダ・ガアグ文・絵、石井桃子訳、福音館書店』、

この本は物語の完成度が高く、物語の舞台と背景をことばではなく、絵で読み取らせる物語絵の極意がある。文と絵の語りが一体となるところに絵本は成立する。」

[講演] 柳田：(いのちと共鳴する絵本)

参考文献 (5) P.85-P.116「柳田」を引用

「長年作家として私は、現代人の「生と死」の問題、現実の社会で起こる事故、災害、公害、病気、戦争など厳しい状況の中で捉えた作品を書いてきた。その流れの中で、息子を失い呆然といてる中で、私はある日書店で絵本コーナーに立ち、息子に読んだ名作がよみがえりなつかしくなった。独り自分で絵本を読むと新しい発見があり、絵の意味や胸に迫る言葉がある。大人が自分のために読む作品としての絵本と捉える意識が大事である。自分が子どもの時、子どもを育てる時、人生後半にはいった時の三度である。」

「(1) (子どもと死と絵本)

『わすれられないおくりもの、スーザン・バーレイ作 (英国)、小川仁央訳、評論社』

「聖路加国際病院小児科部長の細谷亮太先生のエッセーからエピソードを紹介する。」

「細谷先生の勤務する小児病棟に、二歳の男の子良太君が急性脳炎で緊急入院してきた。」

良太君はすぐに深昏睡状態になり脳死に落ちいってしまった。お母さんは8歳の姉の由佳ちゃんと5歳の兄の康平君もおり悩んだが、そのエッセーを読み尊敬していた、主治医ではないが細谷先生に相談された。細谷先生も困ったが、良太君は深昏睡状態であり感覚と意識の上ではなにも感じなくなっており、治療を続けることは良太君を苦しめることではないことをお母さんに説明してわかってもらえた。二人の幼い子どもにどうして死を教えるかが、とても難しい。細谷先生は一冊の絵本を思いついた。この病院には入院している慢性小児患者がおり、子ども向け遊戯室にはその母子のために絵本が二百冊ほど置いてある。それらの絵本には、動物やおじいさんなどの形をかりて命のこと死のこと、別れや悲しみなどを語る作品が多い。その一冊に『わすれられないおくりもの』があった。

細谷先生はベットサイドでこの絵本を由佳ちゃんと康平君を両脇に坐らせて、ゆっくりとページをめくりながら読んで聞かせた。」

「これは動物の森の物語で年老いたアナグマ君が主人公であり、この世での先が短いことを自覚していた。賢くやさしいアナグマ君は村の動物たちから尊敬されていた。最後の日きたのを自覚すると、書き置きを書いてから暖炉の前で最後の眠りに入った。夢の中で暗いトンネルの中、杖をついてやっとあるける病と老いのアナグマ君が不思議なことに体が軽くなり宙に浮いてトンネルの光射す出口めざして体が飛んでいく。(書き置きには)「アナグマ君は死ぬことをおそれてはいません。死んでからだがなくなっても、心は残ることを知っていたからです。」「翌日動物たちがアナグマ君の家をたづねてきます。」

「書き置きには『長いトンネルの向こうに行くよさよなら』とかいてある。冷たい亡骸があり皆は悲しみにくれる。」「冬が過ぎ春がきて皆が集まると楽しい思い出話をする。モグラ君は鋏の使い方を教わり村一番の上手になる。カエル君はスケートを教わり上手になった。キツネ君はネクタイの結び方を教わりおしやれになった。春の日、モグラ君は一諸に遊んだ丘に思い出を抱いて立つと近くにアナグマ君がいるような気がして空に声をかける。ありがとうアナグマさん。」

「最後は(きっとアナグマに聞こえたにちがいありませんよね。)で物語はおわる。その他紹介本省略。」

「一冊の絵本雑誌『たくさんのふしぎ、月刊誌、1998年3月号』『クマよ、星野道夫写真・文』カムチャツカで星野さんが亡くなられたあと、編集者と奥様が協力してつくられた。この「クマよ」を絵本としてとらえている。」

[討議] 参考文献 (5) P.117-P.201 「3者の討議」を引用。

討議では河合、松居、柳田は概ね次のように述べている。

河合は、今日のテーマは「絵本の力・可能性」であるが、絵本を取り上げる意味に、子どもに対する知識の詰め込みが強すぎて、もっと情緒・感性的なものが子供時代には大事である。日本の絵本は世界でも水準が高いのではないか。日本の絵本はたくさん訳さ

れている。絵本は本来的な豊かさのためにも、大人（ビジネスマンにも）に絵本が大事である。

松居は、私は知識の詰め込みに始めから反発して、役にたつ本はつくらない。科学の本も子供が驚いたり・感心し、新発見したりすればよい。

柳田は、大人が読むものとして二人は絵本を重視している。私はおくればせながら絵本を再発見して、のめり込み楽しんでいる。絵本の面白さは二つあり、昔子供に聞かせた本をまた読んで、そのなかの意味や感動を再発見することと、20年余りの新作にふれて、創作が次々に行われて提供されるいい作品をみて驚くことである。

（大人にとって絵本とは）。

「河合：IT革命での考え方には自分が対象の外に立ち操作する、それに対して絵本はその中に入って自分の存在が関わって見るものであり、現代的な意味が高く新しい可能性もある。」

「松居：頭に詰め込む今の教育で育った成績優秀な人がいる。そのような人と話をしている、表情がなく、平板な話し方で、何を感じているのかわからない。」

「柳田：私はノンフィクション作品を多数書いてきたが、人生の大事な魂レベルのコミュニケーションにどこまで関わりあえたかと思ってしまう。髪の毛の白い男が電車のなかで絵本を読んでいると、怪訝な顔で覗かれる。松居：写真に撮りたいな（笑）。」

[討議]「(伝統文化の中の絵本 P.125)」

「松居：日本の子供の本は、絵本を主として3千点を超えて40言語以上で海外へ翻訳されていると思われる。日本の絵本はかなり国際的な賞をとっている。1967年からスロバキヤで開催される「世界絵本原画展：ブラチスラバ・ビエンナーレ」では毎回日本は賞を取っている。1960年代のフランクフルト国際図書展では「戦後20年の日本が水準の高い絵本をつくるのはどうしてか？」と言われる。「日本の絵本作りは敗戦後ではなく、12世紀（中世）と説明する。絵巻に奈良絵本、鳥獣戯画など伝統がある。日本人の得意分野である。」

「河合：あちらは宗教画以外にはない。日本は伝統をもっている。小・中学校の先生が歴史を教えるとき生徒に絵巻を作らせる。面白いのを見たことがある。」

「柳田：「ヨーロッパ中世の修道院」で歌っていた合唱曲の中世の本が保存されており、挿画の絵が添えられている。」

[討議]「(文字と絵をどう構成するか P.130)」

「松居：この『だいくとおにくろ、松居直再話、赤羽末吉、福音館書店』は絵巻物をイメージした。絵巻は連続性と場面変化があり、つながりが重要であり絵本と同じ手法である。

この絵本からテキストも横書きにした。学校の先生から国語教科書と異なると批判されたが、私は理科社会も横書きであると言いまは定着した。横長にして絵が効果的に動くようになった。1963年にアメリカで英語版が出た。鳥獣戯画など言葉がなくても物語が

わかる。

河合：絵巻を作れば、幼稚園では喜ばれる。子供の絵巻コンクールがあっても良い。絵本は親子で一緒につくる人が、増えてきた。写真の絵本『はるにれ、柿崎一馬写真、福音館書店』をライル・ワトソンにあげたら（このような絵本をつくる日本人はすごい）と感激した。はるにれには字が1つも無い。」

「柳田：絵本を見ていて、見開き絵が両方で広がると読んでいた世界が広がり感動する。模写の鳥獣戯画を見たがやはり感動する。」

[討議] (言葉の重要性 P.136)

「松居：編集者の立場で絵本づくりをするときは言葉に大変こだわる。大人などから読んでもらう文章を耳から聴き、同時に絵を見て絵から言葉を読み取る。子供の見ている物語の世界はいきいきと動いており、子供が自分でつくる世界が本当の絵本体験である。絵本編集者は文章と絵を子供の感性で緻密に計算しないといけない。子供の物語は眼に見えるように書くことが鉄則であり難しい。」

「河合：昔話はうまくできている、洗われて洗われて残ってきたから。「だいくとおにくろ」はこどもがすごく好きだ。」

「柳田：昔話を絵本化するのに日本は優れている。松居さんの言葉へのこだわりはすごい編集者だ。」

[討議] 「(魂の現実を表現する媒体として P.145)」

「河合：臨床心理学のわれわれの仲間でも絵本が好きなのは多い。人間の心の深層は絵本といちばん関わりが深い。クライアントの人がよく自分の好きな本をもって来る、心との問題に関わっている。柳田さんが魂という言葉をつかったが、魂の現実が表現しやすい。」

「松居：ヨーロッパでは物語絵が発達しなかったのは、おそらく偶像破壊を教えるキリスト教の影響と思う。ルネッサンスからはいろいろなスタイルの絵がでて一気に開花する。

物語絵本は絵本の中の一つのジャンルで科学的な絵本、詩のような絵本、物語性がないものもある。安野光雅さんが「絵本が書きたい」というので会った。エッシャー画集をみてから書き始めた『ふしぎなえ、安野光雅、福音館書店』の絵はフランクフルト図書展において、彼の地の出版社が見て、「エッシャーのまねではない、面白いね」と言った。」

「柳田：一枚の絵画をみるときに時間を掛けて佇んでいると、書き込まれた人間の悲喜などの中に入っていける。絵本の面白さは、絵本の絵はシュール（非日常的）なので面白いが、大人でも子供でもそう思わないで自然に受け容れられる。」

[討議] 「(写真による絵本 P.151)」

「柳田：同じテーマの絵本と写真を読み比べて面白い発見をした。『老夫婦、ガブリエル・バンサン、BL 出版』はシャンソン歌手の歌詞に合わせて書いた絵本だ。人生を

終わろうとする夫婦が、どちらかが先に旅立ち最後に一人残されてと歌う、絵も寂しい。人生の喪失感が絵の中から伝わる。」

「松居：写真にはまだまだ可能性がある。写真の絵本を出版したが、子供の文化のなかでの絵本を主にしてきた。」

[討議] 「(絵本にどう関わるか P.157)

「柳田：私はまもなく65歳(2001年、5年前)となる年齢的な心動きの中で、文学作品を読み直すと同じ意味で絵本を読んでいる。子供に読み聴かせるよりも先に自分が心震えるものに触れたいとの意識があり、選ぶ本にかなり偏りがある。絵本雑誌『たくさんのふしぎ』、『月刊誌、福音館書店、1998年3月号』『クマよ、星野道夫写真・文』をある雑紙の「二十一世紀に残したい本」のアンケートに入れた。これは詩・哲学・宗教的な世界であり、子供向けの絵本雑紙に入っているのは驚きである。詩も音楽も入っている絵本である。5～8歳ぐらいが通過関門と思う。」

「松居：今は子供たちの言語体験があまりにも貧しい。字を読むよりも大人などに読んでもらう体験をして欲しい。気持ちの伝わる言葉を耳から聴くことが大切である。学校でも先生が物語を読んでやって欲しい。」

「河合：絵本は万人のためにあると私は思っている。読んでもらう体験を経て字を読んでもらいたい。」

[討議] 「(絵本体験の重要性 P.162)」

「柳田：私には絵本体験が二度あって、小学一年時に病気で、三学期いっぱい休み自宅で寝ており、その時友達から借りた本を毎日1-3冊読んだ。「小公子、三銃士、クオレ」などを読んだ。小学六年時2-3学期にかけて午後には、クラスの男の先生が悲しい場面などでは涙声で名作ものをたくさん読んでくれ、名作が胸に入ってくる。これらが大事な読書体験でした。今の学校の先生はやらないのでしょうか。最近各地を歩いて、読み聞かせ運動がボランティア女性などにより児童館などで広がっているようである。」

「河合：テレビやビデオの映像に頼り過ぎているからだろう。民話の収集に行き老人に話しをして欲しいと頼むと、正しいのはテレビでやっていると断る。貴方が知っているのをいちばん聴きたいのだと頼むと、おじいさんおばあさんがだんだん元気になってくる。」

「松居：親が子に読んで聴かせるのは、基本的には家庭である。」

(喪の仕事 P.168) - 喪の話は [討議] も省略する -

[討議] (絵本と恐怖 P.180)

「松居：いまこどもをめぐる事件が多い。今の子供は悪や残酷を知らない。昔話には多くの悪が書かれていて、物語体験を豊かにしておくほうがいい。遠野の二百話語りの語り手である鈴木サツさんと長く付き合いをした。囲炉裏を囲んで子供の時に素晴らしい

語り手のお父さんから聴いている。サツさんは 40 代から語るようになったが、言葉ではなくて父の中に絵が見える。何か語ろうとするときに、その世界が見えてくるので言葉にしている。」

「河合：残酷なことを知らないから、実際に残酷なことをする。テレビを孫と見ていると憂鬱になる。」

「柳田：悪なり恐怖を親子の信頼関係のある読み聞かせの中で体験させる。恐怖の疑似体験をさせる。CG アニメなどを見ると怖いものが沢山でてくるが娯楽の対象であり、内面の奥深いところに刻まれる怖さとは異質である。絵本の読み聞かせで、窓に蛾ががたがた当たり、えたいのしれないものがある、何だろうと思う怖さを子供の情緒生活の中で育てることは大事なことである。」

[討議] (体験を普遍化する P.186)

「松居：読む人の意識に子供に死を教えようとする気持ちがあり、読んでいると頭で理解することとなり、死のもつ深い意味に出会うことにはならないのではないか。」

「柳田：確かにためになる本とか、子供に何か押しつける魂胆があるのは良くない。病院で次のようなこともある。長期入院の難病の児童病棟のプレイルームに様々な楽しい絵本と一緒に「いのち・死別・喪失」についての絵本、動物同士の別れ話、おじいさんが亡くなる話などおいておく所が少ない。いい作品ができた時に死を高いレベルで語れる。」

「河合：置いておくのはいいと思う。子供が読んでもらって自分なりに収めるなら素晴らしいと思う。」

[討議] (二一世紀に残したい絵本 P.193)

「柳田：次の 8 点をあげる。河出・松居は書名をここにはあげてない。

- ①『ちいさいおうち、バージニア・リー・バートン、岩波書店』
- ②『いたずらきかんしゃちゅうちゅう、バージニア・リー・バートン、福音館書店』
- ③『セロひきのゴシエ、宮沢賢治、福音館書店』
- ④『100 万回生きたねこ、佐野洋子、講談社』
- ⑤『老夫婦、ガブリエル・バンサン、BL 出版』バンサンの他数点>
- ⑥『きりのなかのはりねずみ、ユーリー・ノルシュテイン、セルゲイ・コズロフ物語、フランチェスカ・ヤルブーソヴァ絵、福音館書店』
- ⑦『ハリス・バーデックの謎、クリス・ヴァン・オールズ文・絵、河出書房新社』
- ⑧『あこがれの星をめざして、ラッセル・ホーバン文、バトリック・ベンソン絵、評論社』その他」

『柳田邦男；文藝春秋、1999 年 10 月発表「絵本に関するエッセイ」』年特別寄稿
参考文献(6) P.316-P.329「絵本に関するエッセイ」を引用。

IV. 柳田邦男「いま、大人が読むべき絵本」

柳田は絵本が中高年の人生を豊かにしてくれ、子供だけのものではないとしている。

『フランダースの犬』を事例にあげ、少年ネルロは残酷の追い打ちのあとに死を迎える直前に愛犬パトラッシュとのたのしい思い出もたくさんあり《自らの人生への納得》とでも呼ぶべきことを感じていたとする。

『文藝春秋 1999 (平11) 10月号 柳田邦男 (ノンフィクション作家)』

「深く味わいのある珠玉の絵本は、中高年の人生を豊かにしてくれる。少年時代に読んだ物語の最後の情景が、突然頭に浮かんだ。その物語とは、ウィーダの『フランダースの犬』だった。不思議な思い出し方だった。」

(少年ネルロの「納得」)

『フランダースの犬』の主人公・少年ネルロは、寝たきりのおじいさんの代りに毎日、村の農家から牛乳を集め、愛犬パトラッシュに荷車を引かせて、町に売りに行くという貧しい暮らしをしていた。ベルギーのアントワープと近郊の農村が舞台だ。

十五歳になったネルロは、当時ベルギーの巨匠として名声をはせていたルーベンスのような画家になりたいという夢を抱いていた。絵を描くのが何よりも好きだった。そこで、すばらしい絵を描いて、アントワープの絵画コンクールに出品した。最優秀賞に入選した少年には、美術学校の奨学金が与えられることになっていたからだ。

その矢先、おじいさんが息を引き取り、ネルロは無慈悲な管理人から家を追い出されてしまう。クリスマスイブの寒い日、ネルロは食べる物もなくパトラッシュとさまよい歩くうちに、最後の望みを絵画コンクールの発表に託して、アントワープの発表会場に入った。

しかし、最優秀賞は金持ちの息子が父親の裏工作で獲得していた。

最後の望みを絶たれたネルロは、吹雪のすさぶその夜遅く飢えと寒さでふらふらになりながらも、大聖堂にたどり着いた。普段はおおいがかけてあって大金を払わないと見ることでできないルーベンスの大作『十字架をたてる』と『十字架からおろす』という二つの壁画を、死ぬ前に一度見たいと思ったからだった。

ネルロはおおいをはがしたが、ミサの終わった深夜の大聖堂は暗闇で、壁画を見ることはできなかった。ネルロは絶望して石だたみの上に倒れ、パトラッシュに「ふたりで、ここで死のう」と言う。」

「ところが、次の瞬間、奇蹟的に吹雪がやんで、雲の切れ間から姿を見せた月の光が、アーチ型の窓から差しこみ、ルーベンスの壁画をくっきりと浮かび上がらせたのだ。ネルロは思わず立ち上がり、両手をさしのべて、「とうとう見たんだ!」と叫ぶ。—その顔によるこびの涙が流れた。—

「私の脳裏に唐突に浮かんだ『フランダースの犬』の情景とは、このネルロが涙を流す場面だった。私は記憶に誤りがないかどうかを確かめようと、翌日書店に出かけて、児童書コーナーから『フランダースの犬』を探し出して購入し、半世紀ぶりに読み直した。

小学校五年生から六年生にかけて、『家なき子』とともにいちばん好きだった『フランダースの犬』は、四回も五回も読み返していたせいか、記憶に誤りはなかった。

〈——青ざめた顔に、よろこびのなみだが光ました。

「とうとう見たんだ！」ネルロは声をふりしぼって、さげびました。

たしかにそう書かれてあった。しかし、それだけではなかった。その後に、ネルロの詞がさらに続いていた。」

「ああ、神さま、これで、じゅうぶんでございます。」

「この言葉は私の記憶から消えていたものだった。私は、《あっ》と思った。この言葉を読んだ時、私はこの物語の本当の意味——女性の作家ウィーダがこの物語で語ろうとしたテーマ——を、はじめてつかむことができたのだ。それは、《自らの人生への納得》とでも呼ぶべきものだ。

ネルロは、これでもかこれでもかというほど不幸と残酷の追い打ちをかけられる。

《なんとかわいそうな人生だろう。しかも最後には大聖堂の中で凍え死んでしまうなんて！ わずか十五歳だというのに》というのが、小学生時代に読んだ時の印象だった。この世の不幸をすべて背負った不幸な少年の物語——というのが、私の記憶装置に焼きつけられたこの物語のイメージだった。

それは、終戦直後の貧しかった時代にぴったりの読み物だった。私自身の境遇はと言えば、父や次兄を結核で喪って間もない頃で、長兄が小さな古書店を開き、母は手内職をして糊口をしのぎ、私も学校から帰ると手内職の手伝いをしなければならなかった。ネルロの不幸な日々に関心を持って自分の感情を同一化して読みふけていたのだ。」

（誰の人生にも春夏秋冬が）

「しかし、それから五十年近くたって、ちょうど六十歳を迎えた年に『フランダースの犬』を読み直した時、この物語は全く違う意味をもって迫ってきたのだ。

思いどおりにならない人生、辛いことの多い人生、数々の悔いの残る人生。そんななかにあっても振り返ってみれば、やさしいおじいさんとの日々はあったし、心の通った愛犬パトラッシュとのたのしい思い出もたくさんあった。そして、死ぬ前にせめて一度だけでも見たいと思っていたルーベンスの大作壁画を、一瞬射しこんできた月の光によって見る事ができた。」

「ああ、神さま、これで、じゅうぶんでございます」というネルロの言葉は、まさに自らの人生とその終結への納得を意味しているに違いない。それゆえにこそ、「よろこびのなみだ」が頬をつたったのだ。」

「私の息子・洋二郎が二十五歳の若さで自ら命を絶つという事態を経験していたことが、からんでいる。二年がかりで書いた追悼記『(サクリファイ) 犠牲わが息子・脳死の11日』(文藝春秋)を、ご健在だった司馬遼太郎氏に差し上げたところ、氏から感銘深い悔み状をいただいた。その中に、こういう文章があった。」

「……御胸中の万分の一を察し入りつつ、人間のいのちが両親や他の人々にいたわられつつ辛うじて存在していること、いたわりが千万倍ふえようと、掌の中の露の玉のように指の間から落ちてゆくこと、そのはかなさ、それは、内村鑑三のこぼれを強いてあげれば「勇ましく高尚」なものであるかと存じます。吉田松陰は洋二郎さんより、二、三歳上でもって生涯を終えました。「人は、たとえ六十、七十であろうと、二十五、六であろうと、春夏秋冬というのがあるのだ。悔いることはない」と死の直前に書きました。われわれは馬齢であります。二十五歳は宝石であります。まことにまことに。」

「この言葉ほど、息子を喪った後の私の胸の奥に深く落ちてきたものはなかった。そう言えば、吉田松陰も高杉晋作も二十歳代で斃れている。洋二郎の人生を振り返ると、そこには彼なりの「春夏秋冬」があったことが、あぶり絵のように浮かび上がってきた。心を病んだ最後の五年半は、物凄い心の成熟の歳月だった。彼が書き残した短篇文集や日記を読むと、私とその年齢だった頃よりはるかに深く人間を洞察した文章を書いていた。もちろんそれは早く老成したという意味ではないし、老成することが「春夏秋冬」を完結させるという意味でもない。彼なりにこの世に生きた意味が、物語れるだけの文脈を持っていたのだ、とでも言おうか。そんなことを考えるようになって一年ほどたった時、『フランダースの犬』を思い出したのだ。

ネル口はわずか十五歳で死を迎えたけれど、その波乱に満ちた一生はみごとに「春夏秋冬」の内実を持っていた（たとえ自分ではそのことに気づいていなくても）。それゆえに、終幕において念願のルーベンスの壁画に出会えた時、「これで、じゅうぶんでございます。」

「自分の人生を全面的に受け容れ、死をも受け容れる言葉がでてきたのであろう。」

V. 2006 (平 17) 年 6 月 7 日読売新聞掲載谷川と柳田対談 より引用「 」

2005 年 6 月 7 日読売新聞掲載 対談／谷川俊太郎と柳田邦男。

2 人の紹介

「谷川：詩人。1931 年東京都生まれ。1950 年「文学界」に詩を発表。'52 年には第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行して注目される。その後は、詩作を中心に幅広い分野で活躍。最近では、長男賢作氏とともに演奏と朗読のコンサートも行う。

〈主な詩集〉『ことばあそびうた』『定義』『みみをすます』『よしなうた』『世間知らズ』『シャガールと木の葉』ほか多数

〈主な翻訳〉スヌーピーの『ピーナッツ』はじめ多数 〈主な受賞〉1975 年『マザーグースのうた』日本翻訳文化賞／1983 年『日々の地図』読売文学賞

「柳田：1936 年、栃木県生まれ。作家。ノンフィクションの著書多数。最近「生と死」、心と言葉の危機に目を向け、『言葉の力、生きる力』『「人生の答」の出し方』『絵本の力』

(共著)、『砂漠でみつけた一冊の絵本』、『壊れる日本人 ケータイ・ネット依存症への告別』を刊行。絵本の翻訳も手掛ける。

〈主な受賞〉1972年「マッハの恐怖」で第3回大宅壮一ノンフィクション賞、1995年ノンフィクション・ジャンルの確立への貢献と「犠牲（サクリファイス）わが息子・脳死の11日」で第43回菊池寛賞。

谷川は対談の中で、声に出して読むときは聴衆が直接的な反応が我々つくる側に与えてそれが大きな励みとなる。

柳田は本屋の絵本コーナーに通い自分で絵本を探すことを薦め、

気に入った絵本は必ず買ってほしいとする。

(心の豊かさを耕すため～いま、大人にすすめる絵本)「人名：発言内容」

「谷川：詩や絵本の文などをたくさん書いてきたが、近ごろではそれらを声に出して読む機会が増えている。耳で聞いてもらおうと、目で読むだけでは伝わらなかったものが聞く人に伝わる。ことばが頭だけでなくからだに入っていくので、聞く人との間に一種の“場”ができる。詩でも絵本でも、書くときは一人でこつこつ書くしかない“根暗”な作業だが、声に出して読むときは聴衆が目の前にいて、面白ければ笑うし、つまらなければ子どもたちは騒ぎ出す。そういう直接的な反応が我々つくる側には大きな励みなる。また、みんなで声に出すことで、新しい発見や気付かなかった細かいところまで感じ取ることができる。大家族だった昔は、家の中のお年寄りが囲炉裏端で昔話やおとぎ話をしてくれた。私も小さいころ、祖母がこっけいな昔話を身振り手振りでしてくれたのをよく憶えている。声の調子や強弱が筋や意味だけではない話の臨場感を引き出して、聞く人を巻き込む。物語や詩を共有する昔ながらの“共同体”が現代によみがえると言えいいのか。(大人と絵本)ということかというと、もう20年以上も前から、若い女性などの間では「可愛いもの」「楽しいもの」「ファンタスティックなもの」として「絵本」は愛されてきた。そういう絵本はあまり現実の生活や感情に根ざしていなかった。しかし、最近では人間の老いや死や別離を扱ったものがどんどん読まれている。私も最近、ずばり『悲しい本』(サッド・ブック)というタイトルの絵本を訳した。始めは、あまりに暗いタイトルで少し表現をやわらげようという意見もあったが、最終的にはそのものずばりで行って、それが読者の共感を呼んでいるようだ。出版界も変わってきている。」

「谷川：しかし、これだけたくさんの絵本や童話の本の中から、自身に合ったものを探し出すのは大変だ。絵本は決して子供たちだけのものではないということである。」

「柳田：よくおすすめの絵本を聞かれるが、私は本屋の絵本コーナーに通うことをすすめている。第一、そこに立っているだけで穏やかな気分になれる。」

「谷川：そしてピンとくる好きな作家や画家と出会う。それはいわば運命的な出会いだと思う。(人が何と言おうと、私はこの本が好きだ!)(この絵が好きだ!)という独断的な選択が、つまりは自分に合ったものを見つける近道ではないだろうか。」

「柳田：一人で黙読しているのは、頭だけで考える——いわば「眉毛の上だけ」の読書（笑）。それに対し、人に読んでもらおうとズンズンと入ってくる。絵の細かいところまで見入りながら、全身で、それこそ五感をフルに働かせて味わうものだと思う。単に可愛いだけではない、人生を立て直すきっかけにもなる。（大人こそ絵本を）という運動は、くつろぎの時間に絵本をゆっくり味わってもらおうと始めたが、近頃、大人たちが集まって、自分たちのために絵本や童話の読み聞かせをする活動が見られるようになってきた。これはなかなか感動的だ。十数人のグループが絵を見ながらじっと話に聞き入る。そうすると、みんなの顔つきが変わってくる。涙ぐむ人もいる。そして話が終わると、日常の世界とは違うファンタジーの世界に遊んだり童心に帰ったり、普段とは違う不思議な時間と空間が生まれている。」

「柳田：（絵本は人生で三度読む代々受け継いでいくもの）

私は、常日頃から「絵本は人生で三度読むべき」だと提唱している。幼い時、親になった時、人生の後半に差しかかった時だ。読み返す度に新鮮な感動を呼び覚まし、心を豊かに耕してくれる。いつしかそれが“座右の絵本”となり、心の持ち方や想像力を取り戻す手助けをしてくれる。」

（買って読むことで新たに気付くこともある）

「柳田：絵本購入について、もちろん図書館から借りてくるのも良い。しかし、気に入った絵本は必ず買ってほしい。買うことで、本との向き合い方も変わってくる。それに、思い出した時に何度も何度も読み返すことができ、ある時ふと隠されたテーマに気付いたり、突然心の支えになることもある。私もここ数年、年に二～三冊のペースで翻訳に取り組んでいますが、実は70歳になったら創作の方にも挑戦してみようかと思っている。それと、さまざまな形の雲の写真に文章を添えた絵本づくりもしてみたい。欲張りでしょうか（笑）」

「谷川：絵本の翻訳は楽しいけれど難しいこともある。原書のレイアウトを崩さないように、文の長さを揃えとか、声に出しても伝わるやさしい、リズムのある日本語になるように、ときには意識に近いこともする。」

「柳田：全く同感。私もここ数年、年に二～三冊のペースで翻訳に取り組んでいますが、実は、70歳になったら創作の方にも挑戦してみようかと思っている。それと、さまざまな形の雲の写真に文章を添えた絵本づくりもしてみたい。欲張りでしょうか（笑）。」

「谷川：70歳って、もうすぐじゃないです（笑）。でも期待しています。絵本の可能性はまだまだ無限で、さまざまなスタイルがあっていいと思う。」

「柳田：絵本はただ可愛いだけ、楽しいだけではなく、時には悲しい思いや体験を表現するものでもある。この間、突然ご主人を亡くした上に、寂しさを紛らわすために飼った愛犬までも死んでしまったという女性の話を聞きいた。悲しみに暮れてぼう然としていた時に、娘さんから一冊の絵本を贈られた。それが菊田まりこさんの『いつでも会える』だった。本のストーリーにもあるように、目をつぶればいつでも大好きだったご主

人や愛犬に会うことができる。そして、この小さな絵本が、人生を立て直してくれるきっかけになった。」

(異なった文化や風習と出会う可能性広がる翻訳本)

「柳田：翻訳ものに関しては、これまで西欧の作品が中心だったが、最近ではインドや韓国、中国など、欧米のものとは違うタッチの絵本も翻訳されるようになり、新しい発見がある。『パパといっしょに』という韓国の絵本はソウルが舞台なのですが、ソウルには緑の山が多く、人々が親子連れなどで日常的に山遊びをしているのを、この絵本で知った。」

「谷川：異なった文化や風習と出会うことができるのも、絵本の可能性といえる。」

VI. 回想法について。－老年期の回想 (Reminiscence) －

『写真でみせる回想法・解説編第1章回想法とは (P.64-P.78)、志村ゆず・鈴木正典編、伊波和恵他著、弘文堂、2004年(平成16年)8月』より。

参考文献 (8) (P.64-P.78) 引用

「『写真でみせる回想法』、(回想法)は話し手が、過去の思い出を語り、話の聞き手との交流を通じて、人生を振り返る支援をすることで、話し手の心の安定と周囲のさまざまな人との質の高い交流を目指す援助の方法である。回想法は日本の高齢者の医療・福祉の現場でとてもポピュラーになりつつあり研修の機会もあるようになった。回想法は英語の *reminiscence therapy* 等とされる援助方法が日本に輸入され回想法の名称で知られようになった。」

「ライフレビューの考えは、米国精神科医師のロバート・バトラー博士が提唱した。精神科入院中患者に精神療法をするのに、病気の経緯を聞くとともに、家族からも患者の生活歴史を聞き治療にも積極的に参加してもらうことが、大切であると指摘した。当時米国の多くの専門家が記憶喪失する高齢者が、現在よりも過去に目をむける老化症状と考えていた。過去を振り返る行為が、後ろ向きではなく前向きの行為ととらえる、このライフレビューの提唱は画期的なものであった。博士は人生を振り返ることは、高齢者はだれもが近づく死に現実に向き合うことであり、ごく自然に経験する健康なプロセスであると主張している。過去の解決されていない葛藤を積極的に意識し、眺めることは気持の安定につながると博士と説く。」

「(神澤氏の文)より、高齢者は昔の出来事を思い出すことが多くなり、絵本や童話についての効用は、老年期の回想法の考え方を応用することが可能である。それまで否定的にとらえられてきた老年期の回想を促進し心理学的援助に応用され、肯定的に再評価されている。次の引用文の関西福祉科学大学 教授 神澤 創氏の説明 (2006年(平成18年)9月)が、適応すると考えられる。」。参考文献 (9) HPより引用。

以下引用文「 」

「写真でみせる回想法」回想法とは話し手が、過去の思い出を語り、よい話の聞き手との交流を通じて、人生を振り返る支援をすることで、話し手の心の安定やその人の周囲のさまざまな人との質の高い交流を目指す援助の方法である。回想法は日本の高齢者の医療・福祉の現場でとてもポピュラーになりつつあり、参考書もあり、研修の機会もあるようになった。回想法は英語の *reminiscence therapy* (レミニッセンス・セラピー)、同 *work* (レミニッセンス・ワーク)、*life review therapy* (ライフレビュー・セラピー) とされる援助方法が日本に輸入されて、回想法の名称として知られるようになった。ライフレビューの考えを、米国精神科医師のロバート・バトラー博士が提唱した。精神科入院中患者に精神療法をするのに、病気の経緯を聞くとともに、家族からも患者の生活歴史を聞き治療にも積極的に参加してもらうことが、大切であると指摘した。当時米国の多くの専門家が記憶喪失する高齢者が、現在よりも過去に目をむける老化症状と考えていた。過去を振り返る行為が、後ろ向きではなく前向きの行為ととらえる、このライフレビューの提唱は画期的なものであった。博士は人生を振り返ることは、人はだれもが向える死に現実に向き合うことであり、だれもがごく自然に経験する健康なプロセスであると主張している。過去の解決されていない葛藤を積極的に意識し、眺めることは気持ちの安定につながると博士は主張している。」

引用文「関西福祉科学大学 教授 神澤 創」 参考文献 (9) HP 引用

「人は年をとると昔の出来事を思い出すことが多くなるようだ。1963年、米国の精神科医ロバート・バトラー (Butler R.) は、それまで否定的にとらえられてきた老年期の回想 (Reminiscence) を肯定的に再評価することを提唱した。老年期における回想を促進し、心理学的援助に応用したものが回想法である。欧米ではすでに30年以上にわたって回想法に関する理論的研究や臨床実践が行われており、日本の高齢者施設でも、回想法を用いた活動が行われているところが増えている。人間の記憶は、情報の単なる再生ではなく、本人にとって特別な意味を持つ出来事や体験の中から選択的に再構成されるものだ。回想においては、記憶の再生だけではなく、その時の感情や出来事への評価が重要とみなされる。ずっと抱え続けてきた辛い体験の記憶が、新しい意味付けによって見直され、気持ちが楽になり、その人なりの感情の整理が行われることもある。」

参考文献 (文中発言者の引用作品名は記載しない。)

- (1) 『毎日新聞社「読書世論調査」1998年版』
- (2) 『高齢者と適応、藤田綾子、ナカニシヤ出版、2000年3月』
- (3) 『足立区中央図書館(千住五丁目)「高齢者への読み聞かせ」2005年10月11日』
HP : <http://www.ohanashiehon.com/sp/yomikikase/>
- (4) 『「東京都老人総合研究所 藤原佳典・主任研究員「シニア読み聞かせボランティアの実践」』

HP : http://www.tmig.or.jp/J_TMIG/J_index.html

- (5) 『絵本の力、河合隼雄、松居直、柳田邦男、岩波書店、2001年6月205頁』
- (6) 『柳田邦男、文藝春秋、1999年10月発表「絵本に関するエッセイ」』
- (7) 『2006年6月7日読売新聞掲載谷川と柳田対談』
- (8) 『写真でみせる回想法・解説編第1章回想法とは (P.64-)、志村ゆず・鈴木正典編、伊波和恵
他著、弘文堂、2004年8月』
- (9) 『関西福祉科学大学 教授 神澤 創』

HP : <http://www.tezukayama-u.ac.jp/Teacher/sinri/ss09.html>

(3)(4)(9)はHPを引用。